

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 30 日現在

機関番号：32411

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520317

研究課題名(和文) 英国十八世紀における牧歌の研究

研究課題名(英文) A Study of Pastoral in the Eighteenth Century Britain

研究代表者

海老澤 豊 (EBISAWA, Yutaka)

駿河台大学・法学部・教授

研究者番号：90298307

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の対象は18世紀英国の牧歌だが、前提としてテオクリトスとウェルギリウス、ルネサンス期イタリア、スペンサーやミルトンの牧歌を概観した。これらは18世紀初頭の英国で起きた牧歌論争を分析するために必要な手続であった。

18世紀英国の詩人たちは「田園で羊飼いが歌い交わす」牧歌を変形し、地方色牧歌、都会風牧歌、漁夫牧歌、異国風牧歌、反奴隷牧歌などを生み出し、牧歌という古い器に新しい酒を盛ろうとした。

研究成果の概要(英文)：This study surveys a variety of Pastorals in the Eighteenth Century Britain. As a premise, Idylls of Theocritus, Eclogues of Virgil, Pastorals in the Renaissance Italy, Spenser's Shepherd's Calendar and Milton's "Lycidas" are discussed.

The Eighteenth Century British Poets transformed a traditional pastoral into various types of new ones, such as Local Pastorals, Pastoral Ballads, Town Eclogues, Piscatory Eclogues, Exotic Eclogues. They put new wine into the old bottles, and Romantic Nature Poems took the place of old-fashioned Pastorals.

研究分野：英文学

キーワード：18世紀英文学 英詩 牧歌

1. 研究開始当初の背景

これまで英国 18 世紀の詩歌をジャンル別に概観する研究が続けてきており、その成果は『田園の詩神～十八世紀英国の農耕詩を読む』(国文社、2005 年)と『頌歌の詩神～英国十八世紀中葉のオードを読む』(国文社、2010 年)にまとめた。本研究はその第三弾にあたる。

2. 研究の目的

(1) テオクリトスやウェルギリウスに代表される古典牧歌の特徴や内容や表現を吟味し、牧歌の基本的な要件を明らかにする。またルネサンス期イタリアで開花したペトルルカやマンチュアヌスの宗教的・諷刺的な牧歌を読み解き、英国の牧歌に与えた影響を探る。さらにスペンサー、ミルトン、マーヴェルなど 17 世紀英国の牧歌詩人の足跡をたどり、18 世紀の牧歌との関連性を探る。

(2) 18 世紀初頭に英国で起きた牧歌論争の内容を検討するとともに、さまざまに細分化・変形された牧歌(地方色牧歌、牧歌風バラッド、都会風牧歌、漁夫および釣魚牧歌、異国風牧歌、反奴隷制牧歌など)の特徴を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) テオクリトスとウェルギリウスの牧歌を詳細に検討することで、牧歌でしばしば用いられるモチーフ(心地よい場所、過酷なエロスなど)を抽出し、近世以降の牧歌でそのモチーフがいかにも模倣されているか、また変形されているかを調べることで、伝統的な牧歌がいかにも変質していったかを明らかにする。

(2) 牧歌論争の焦点は古典風な牧歌と英国風牧歌の優劣を決めることにあった。両陣営に属する詩人たちや批評家たちの主張を丹念に拾い上げ、その相違点などを分析する。また 18 世紀英国で大きな変貌を遂げた種々の牧歌(上述)を分類ごとに仔細に読み解き、その本質を探るとともに、19 世紀における牧歌の衰退にも目を向ける。

4. 研究成果

(1) 古典牧歌研究

テオクリトスの牧歌は、後世に牧歌と呼ばれる作品とはかなり異質であるが、題材の豊富さ、表現の多様性、神話的な広がり、牧歌的ペルソナの採用など、後世に多大な影響を与えた。彼が牧歌に導入した種々のモチーフは、ウェルギリウスを始めとする詩人たちの道しるべとなった。特に第一牧歌は、心地よい場所、エクフラシス、パストラル・エレジーなどの模範となった。モスコスとピオンはテオクリトスには及ばないが、パストラル・エレジーの発展に寄与した。

ウェルギリウスはテオクリトスを踏まえながらも、帝政ローマの政治状況などを作品に取り入れ、古典牧歌を完成した。特に悠々自適なテュルシスと放浪するメリボエウスの対話で構成される第一牧歌は、18 世紀の英国でもなお模倣された。また第四牧歌は本来なら牧歌とは馴染まない崇高な詩歌を作り上げることに成功し、第六牧歌でも創世神話を高らかに歌い上げるなど、牧歌の枠組みを拡大した。カルプルニウスとネメシアヌスは、ウェルギリウスの影響を受けながらも、皇帝賛歌や円形競技場の華麗な描写など、新たな題材を扱っている。

(2) 近世の牧歌

ダンテ、ペトルルカ、ボッカチオ、マンチュアヌスは、政治的・宗教的な騒乱を題材にして、高位聖職者を非難するなど牧歌に諷刺的な要素を導入した。また恋人との離別、桂冠詩人たらしむる欲望、宗教的生活への不安など個人的な葛藤もしばしば牧歌で表現した。いずれもアレゴリー性の強い牧歌的ペルソナを多用することが特徴である。

サンナザロは牧歌の舞台を海浜に、歌い手を羊飼いから漁師に置き換えて、漁夫牧歌を創始した。海や漁や海棲生物の描写は従来牧歌には見られなかった斬新さを獲得している。ただし彼の描く漁師は詩人自身や国王・貴族などの牧歌的ペルソナであり、当時の政争が影を落としていることはペトルルカやボッカチオと共通する。

スペンサーは『羊飼いの暦』で、マンチュアヌスの影響下に、牧歌に諷刺的な色彩を取り入れ、宗教的な題材を扱った。また 12 ヶ月を題名とする 12 篇の牧歌は、互いに関連性を持ち、コリン・クラウトを歌い手とする数篇は次第に衰退へと向かう道程でもある。スペンサーは古典牧歌を踏まえながらも、英国の動植物や風物を積極的に取り入れて、英国風牧歌の見本を示した点で重要である。

フレッチャーはサンナザロに倣って、英国風の漁夫牧歌を生んだ。彼の漁師たちも詩人や家族・友人などの牧歌的ペルソナであり、父親や詩人の失意や歎びが題材となっている。これ以降は研究計画にはなかったものだが、スペンサーと 18 世紀詩人をつなぐ結節点として必要に迫られて追加した。マーロウが書いた「恋する羊飼いから恋人に」は牧歌風の抒情詩だが、ローリーやダンやヘリックはその模倣作を生み出した。ミルトンは「リシダス」でパストラル・エレジーの伝統に倣いながら、宗教的な問題を扱うとともに、選ばれた詩人になろうとする葛藤などを描き出した。マーヴェルの「草刈り人」を歌い手にした一連の牧歌は、伝統的な牧歌に倣いながらも、自然と人間の関係を洞察している。

(3) 牧歌論争

17世紀フランスでボワローとフォントネルがそれぞれ牧歌論を書いた。前者は古代派として牧歌は黄金時代の羊飼いを描くものと主張し、一方で現代派の後者は牧歌は自然に包まれた心理的な安らぎを描くものとしている。両者の対立は18世紀英国で、古典派でウェルギリウスを模倣したポーブの牧歌と、英国派でスペンサーに倣ったフィリップスの牧歌の優劣に関する牧歌論争に発展した。ポーブの盟友ジョン・ゲイは、フィリップスを揶揄する目的で、スペンサー風で故意に土俗的に描いた『羊飼いの一週間』を発表したが、皮肉なことに詩人たちはこれを競って模倣するようになり、英国の牧歌はフィリップス派の隆盛を招く結果となった。

(4) 牧歌の変容

ゲイに刺激を受けて地方色を全面に押し出し、素朴な羊飼いを歌い手として、各地方の方言(巻末に小辞典がつくことが多い)を多用する「地方色牧歌」が、スコットランドのラムジーやファーガソン、ヨークシャーのドーソン、カンバーランドのレルフなどによって書かれた。彼らの牧歌はロンドンの読者に歓迎されたが、語彙や注釈を求める声も少なくはなかった。

ポーブ派の牧歌は「牧歌風バラッド」として生き残った。リトルトンの「愛の進展」は四部から構成され、若い男女が誤解を乗り越えて結ばれるまでを描く物語風の抒情詩である。シェンストーンはこれに倣った「牧歌風バラッド」を書き、多数の模倣作を生むに至った。カニンガムは微温的な牧歌風の抒情詩を書いて好評を得た。ウィリアムズはウェールズ風牧歌と称する作品を多数残したが、地方色は薄く、牧歌というよりも自然詩である。

スウィフトとゲイは舞台を田園から都会に、歌い手を羊飼いや有閑夫人や放蕩者に置き換えた「都会風牧歌」を生み出した。モンタギューはポーブやゲイと共作しながら『都会風牧歌』を独自で出版した。恋の嘆きが主題になることが多いが、ロンドンの有名店や人気スポットなどが言及され、貴族階級の墮落と奢侈がまざまざと描かれている。18世紀後半にも「都会風牧歌」は書き続けられたが、ごみ掃除人や死刑執行人など社会の底辺に生きる人々が、日々の辛さや悲しみを歌い上げるといった内容に転化した。

ダイパーはルキアノスの「海神たちの対話」に倣って『海精たち、すなわち海の牧歌』を書いた。歌い手は神々やその眷属であり、古典牧歌のモチーフはほとんど見られないが、主題そのものは恋の嘆きが中心である。またブラウンはウォルトンの『釣魚大全』を韻文化した『釣魚牧歌』を発表した。彼らの

牧歌では水棲生物に関する蘊蓄などが多数披露されており、独特な雰囲気満ちている。

コリンズの『ペルシア牧歌集』は牧歌の舞台を異国に移した「異国風牧歌」の先駆けとなったが、英国の女性や国王に対する諷刺が垣間見られる。ウォートンの『ドイツ牧歌集』はヨーロッパの戦乱に取材した戦争牧歌で、チャタトンの「アフリカ牧歌」三篇にはヨーロッパ人の奴隷貿易に対する糾弾が満ちている。ジョーンズやアーウィンの東洋風牧歌は、旅行記や異国情緒にあふれた物語詩の体をなしているが、英国の植民地支配に対する批判も含まれている。

次第に政治的な様相を見せ始めた「異国風牧歌」は、ラシュトンやマリガンによって反奴隷制度を標榜する政治詩と化し、アトキンソンは「ヒベルニア牧歌集」で、大飢饉で難儀を重ねるアイルランド人の悲哀を描き出し、サウジーは「ボタニーベイ牧歌集」でオーストラリアに流刑となった人々の苦難を主題にしている。

18世紀に細分化された牧歌は、もはや古典牧歌とは異質な存在となった。18世紀末には伝統的な牧歌はほとんど姿を消し、社会の底辺で暮らす人々が、困窮した生活や奴隷となった怒りなどを、口語的な表現を取り混ぜて歌い交わす対話詩や、自然をありのままに歌う自然詩に取って代わられていったのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

海老澤 豊 「十八世紀英国における牧歌風バラッド」 『駿河台大学論叢』第50号(2015)189-202 査読無
<http://ci.nii.ac.jp/nrid/9000304625225>

海老澤 豊 「アラン・ラムジーの牧歌」 『駿河台大学論叢』第49号(2014)111-124 査読無
<http://ci.nii.ac.jp/nrid/9000278504224>

海老澤 豊 「十八世紀英国における異国風牧歌」 『駿河台大学論叢』第48号(2014)1-26 査読無
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009872009>

海老澤 豊 「十八世紀英国における都会風牧歌」 『駿河台大学論叢』第47号(2013)81-108 査読無
<http://ci.nii.ac.jp/nrid/9000243855521>

海老澤 豊 「十八世紀英国における漁夫牧歌」 『駿河台大学論叢』第45号(2012)

27-54 査読無
<http://ci.nii.ac.jp/nrid/9000237674367>

海老澤 豊 「スペンサーの『羊飼いの
暦』」 『駿河台大学論叢』第 44 号 (2012)

23-52 査読無
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009456228>

海老澤 豊 「ジョン・ゲイの『羊飼いの
一週間』」 『駿河台大学論叢』第 43 号
(2011) 37-61 査読無
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008798307>

海老澤 豊 「十八世紀初頭の英国にお
ける牧歌論」 『駿河台大学論叢』第 42 号
(2011) 109-133 査読無
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008664804>

海老澤 豊 「トマス・ウォートンの『ド
イツ牧歌集』」 『駿河台大学論叢』第 41 号
(2010) 1-19 査読無
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007982133>

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
<http://faculty.surugadai.ac.jp/sudhp/KgApp?kyoinId=ymyigykydgggy>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

海老澤 豊 (EBISAWA Yutaka)
駿河台大学・法学部・教授
研究者番号：90298307

(2) 研究分担者
なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者
なし ()

研究者番号：